

鎌田東二 神話詩三部作 堂々完成

詩集『狂天慟地』 9月1日発売予定

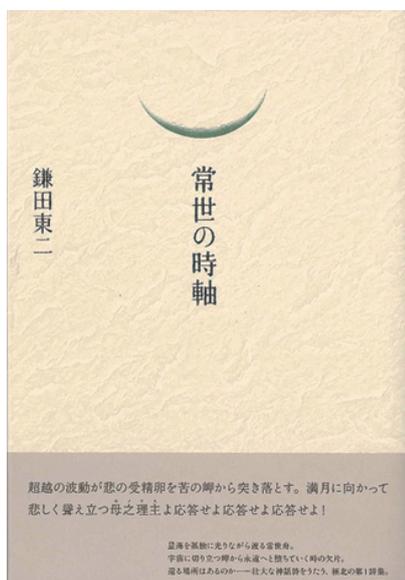
……十七歳になったばかりの春、青島を訪れた時の衝撃がきっかけとなって詩を書き始めた。

……二〇一八年に第一詩集『常世の時軸』（思潮社）を出し、その一年後の本年二〇一九年に『夢通分婉』（土曜美術社出版販売）を出した。三十五年前の一九八四年に神話詩小説『水神傳説』（泰流社）と全ひらがな詩集『りしゆのえろす』（メタモルフォーゼ社）を出して以来の詩の集成であった。

詩を書き始めて五十年、半世紀が経って、自分なりのけじめというか区切りをつけたかった。そして、その区切りは、本詩篇『狂天慟地』（土曜美術社出版販売）をもってひとまず完結する。この三作『常世の時軸』『夢通分婉』『狂天慟地』は私にとっては神話詩三部作となり、ひとつらりのものである。

抑え難い衝動とともに詩を書き始めてしばらくして、「高3コース」（学研）の詩欄に載っていた田辺高校三年生の田村君（申し訳ないが下の名前を亡失した）の「みなさん天気は死にました」という詩を読んだ。選者は寺山修司だった。その言葉が私の中で鳴り響きつづけ、一九七〇年五月に大阪の心斎橋で作演出した「ロックンロール神話考」というアンガラ風音楽劇の冒頭で、狂言回し役の男が「みなさん天気は死にました」と言って出て来、続いて神代のイザナギ・イザナミの原父母が沢山の子供を産んだがその子供が分からなくなったと言って子供探しの旅に出、次に現代の青少年少女探偵団が自分たちには父母がいるが本当のお父さんお母さんがいるはずだと言って真実の父母探しに出る旅の途次、さまざまな経験を遍歴し、ついに世界が滅亡してしまうが、ある超越的な力で甦るかもしれないという暗示で神話劇は終わる、というものに変容した。

「みなさん天気は死にました」のメッセージを初めて目にして以来、五十一年の歳月が経ち、本『狂天慟地』に結実した。そして、青島に始まった場所と言葉の旅は、ラオスの首都ビエンチャンのメコン川を前にして一つの区切りを持った。……（「跋」より）



『常世の時軸』

2018年7月 思潮社
2,000円+税



『夢通分婉』

2019年7月 土曜美術社出版販売
2,000円+税



『狂天慟地』

2019年9月 土曜美術社出版販売
2,000円+税（予価）